

平成30年度第7回観察会 記録

日 時	平成30年10月30日(火)、及び10月31日(水)	
観察地	滋賀県安曇川駅周辺(安曇川河原、針江生水の郷、石田川)	
講 師	藤岡 康弘先生(元滋賀県水産試験場長、びわ湖の森の生き物研究会事務局長)	
テー マ	針江生水の郷とビワマスの産卵見学	
備 考	参加者数:10月30日 27名、10月31日 26名	記録:藤原雄平

はじめに

本年度2回目の琵琶湖観察会は、びわ湖固有種であるビワマスの捕獲と産卵の現場を観察し、生命の循環の神秘さを体感すること、ならびに新旭町「針江生水の郷」で、びわ湖周辺の豊かな自然や水辺の暮らしや地域の人々と触れ合い、現代の暮らしを見つめ直すきっかけにしたいとの思いから計画した。前回同様、びわ湖の森の生き物研究会事務局長藤岡康弘先生の案内で2班が2日に別れて実施。

1.北舟木漁協にて

JR湖西線安曇川駅9時10分に集合。藤岡先生(写真左)に出迎えいただき、マイクロバス(10/31は中型バス)で北舟木漁協組合事務所を訪問。木村常男組合長と藤岡先生にヤナ(棚網)によるビワマス漁の方法や現状などを説明していただいた。

北舟木漁業組合は昭和27年に発足、現在組合員70名とのこと。



(1) ビワマス漁のヤナと漁法について、木村組合長の説明(要旨)

① 産卵のために琵琶湖から安曇川に遡上するビワマスを川幅いっぱいに張り巡らした網ヤナ(写真1)で捕獲する。ヤナは上流、中流、下流の3か所に設置。上流側で荒ごみを取り除き、中流部で形状の異なる2つの網を組み合わせ、この網で捕獲する(写真2)。



川幅いっぱいにヤナを設置



ビワマスはこのヤナの左側で飛び上がり網の中に納まる

- ① ビワマスの遡上は天候がしぐれでいるときに多い。
- ② 採卵は毎年10月20日からで、乱獲防止のため100万粒採取すると終了する。
- ③ このヤナで捕獲したビワマスから採取した卵と精子を知内川漁協で受精させ、稚魚を翌年の3月頃にかけて5~6cm程度まで育て、びわ湖に約70万匹を放流する。

(2) 本日のヤナで捕獲したビワマスの回収は終わっていたが、捕獲ビワマスがオス、メス別に川岸の生け簀に入れてあり、組合長はそれぞれを取り出し、まじかに見せていただいた。ほとんどの参加者がビワマスをじっくりと見るのは初体験で、きれいとか、大きいとかの感想が飛び交い、思い思いに写真撮影を行った。



生け簀から取り出し見せていただいた（オス）

右写真上=メス、下=オス



ヤナは琵琶湖では他には1か所しかないという。その勇壮な姿に感嘆の声が上がった。

（3）漁協事務所にて

1) 木村組合長

- ① このヤナ漁は古くから行われ、一説には1千数百年前から行われてきた伝統漁法であり、京都上賀茂神社の神饌として納める「御厨（みくりや）」として認定証を授与されている。（右写真）
- ② この漁法は平成18年に水産庁が「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産100選」に選定。近年ビワマス漁獲量が減少傾向にあり、またヤナ設置期間は盗人対策の夜警などの苦労があるが、貴重な漁法であり私たちは今後も守っていかねばならない責任を負っている。
- ③ ビワマスが一番おいしいのは5月、卵はイクラのように食べられる。



2) 藤岡先生康弘先生

ビワマスの生態についてパワーポイントを使用して詳しい解説があり、その理解を高めた。
(漁協の和室にて昼食)

2. 針江生水の郷

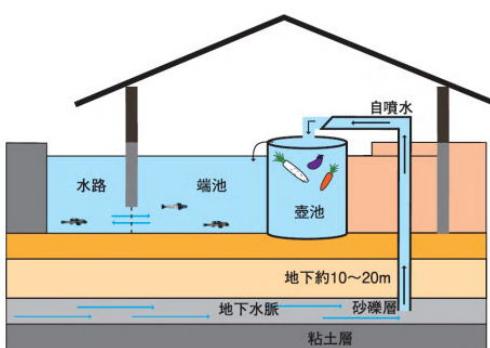
昼食後、道の駅「藤樹の里あどがわ」で、トイレ、お土産購入のため休憩の後、針江生水の郷へ。

生水の郷では3班に分かれ、それぞれガイドの案内で生水の里を川筋に沿って見学した。比良山系に約100年前に降った雪や雨が伏流水になり、湧水になって村落のあちこちで噴出しており、川にはそのまま飲める清水が滔々と流れ、10月末だというのに梅花藻が白い花をたくさん付けていた（写真右）。



- (1) 川端には母屋の内部にある内川端、別棟や屋外にある外川端があり、我々は外川端を案内された。井戸から湧出した地下水はまず壺池と呼ばれる部分に注ぎ込み、そこから溢れ出して壺池の周囲にある端池に注ぐ。端池にはコイやニゴロブナなどの比較的大型の淡水魚が飼われている。端池は集落内の水路と繋がっており、端池から溢れた水は水路に出て集落の中央を流れる針江大川へと流れ込み、最終的に琵琶湖に流れ込むこと。市の上水道はトイレ、風呂などに使用し、飲料用にはもっぱら地下水を使用する。
- (2) 地下水の温度は一年間通じ13~14°Cに保たれており、壺池の水は飲料水や料理用の水に用いる。

壺池の水は夏でも冷たく、野菜や果物、麦茶などを冷やすのに使用。一方、端池に食べかすや野菜屑、使用した皿や鍋などを入れておくと池の魚が全て食べてくれるので、とても便利です。



- (3) 水路や針江大川には、コイ、オイカワ、タナゴ、ヨシノボリ、サワガニ、カワエビなどが生息しており、ここでも食べ物屑を食べ、浄化してくれる。
- (4) 水路や針江大川にはアユやビワマスなども遡上してくる。琵琶湖固有種のセタシジミが針江集落では通常的に見られるという。
- (5) このような壺池、端池、水路、針江大川、琵琶湖という水の流れの上に成立する生態系は非常に巧妙なバランスを保っており、人間の食べ残しによって水が腐るというようなことは無いとのこと。
- (6) 川端 (かばた) 以外の取り組み

① 川、湖を汚さない

リンを含む合成洗剤に代わって回収した天ぷら油などを原料に、リサイクルしたせっけんを使用し、川、びわ湖を汚さない運動を展開。(滋賀県あげての取り組み)
かつての石けん運動に止まらず、琵琶湖の水環境を守るための市民による地域の環境保全活動は、現在も多種多様に展開されているとのこと。

② 常夜灯とミニ水力発電

集落内を流れる多くの水路は以前は生活雑排水が流れる水路であったが、平成9年4月に高島浄化センター（下水処理施設）ができ、国道161号線バイパス沿いに下水道管を埋設した。そのとき下水道管に適量の空気を取り入れる管が地上に必要となり、集落内には38本の空気の取入口（空気孔）を設けることになり、空気孔を常夜灯に変身させ、水路のミニ発電機や水車などで発電し、夜間常夜灯を灯すことにしたとのこと。清流を生かした町に一層の風情ができ、よいアイデアに大いに感心したことであった。



- ③ 川の掃除を集落の全員で行う。刈り取った藻は畑や田の肥料にする
- ④ 上流の人は下流の人の気持ちを思いやり、生水の郷の水を使う。このような心づかいを集落の全員が心がけている。
- ⑤ このような集落全体が水を大切にする生活の在り方が高く評価され、2016年、インドネシア・バリ島で開催された第16回世界湖沼会議に招かれた。滋賀県から三日月知事、野田県議会議長を

はじめ県職員やNPO関係者等が出席した。三日月知事が石けん運動などの県民と行政が一体となった活動の歴史や、「琵琶湖の価値を活かしながら守っていく」現在の取組について講演したこと。

3. 石田川からビワマスを観る

安曇川よりも少し湖北寄りに流れている石田川の中流域へ、ビワマスの産卵を見るため移動。針江生水の郷では秋晴れの好天であった空模様が暗くなり、しぐれ模様に変化。藤岡先生から、ビワマスの産卵が見えるかどうかは運次第とのお話が事前にあったが、石田川に架かる橋から見下ろす川面に魚影を見つけることがなかなか出来なかつたが、幸い1匹のオスのビワマスを発見。しかし1匹では産卵にはならず、泳いでいる様子をただただ眺めるだけに終わってしまいました。

10月31日は、1匹も見ることが出来ず、いつかまた別の機会へとお愉しみは持ち越しとなつた。

＜スタッフ感想＞

ビワマスが琵琶湖の固有種を代表する存在であることは知っていたとしても、ヤナや魚の姿をまじかで見ることはほとんどの人にとって初体験。漁協組合長と藤岡先生のお話で、ビワマスの厳しい現状についても理解が進んだと思います。針江生水の郷では、湧水を利用した昔から今に続くエコな生活様式に、予想以上の感動を受けた人が多く、生水の郷見学を観察会の中に組み込んで良かったと喜んでいます。ビワマスを賞味出来ていたら、参加者の満足度はもっと上がっていたと思いますが、今後に期待下さい。

以上